
小さな国のお姫様と大きな国の兵士の物語。

雨宮 透子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな国のお姫様と大きな国の兵士の物語。

【Nコード】

N6334M

【作者名】

雨宮 透子

【あらすじ】

過去に貿易で繁栄し衰退した小国の美しい末姫フィノアと、戦争で築いた大国の兵士ティータ。惹かれあうが決して結ばれることのない二人。それでもティータは……

末姫

海風の吹く小さな国。

なだらかな山肌と、少しの平らな土地。

わずかな領地の変わりに発展した水上都市は見事なものだ。

網目状に橋が広がる街の中央に、白磁の城が築かれ

他国のように防壁や砲台は設置されていない。

王は優しく、豊かな財政、穏やかな気候、流れる季節も美しい。

長らく戦争も無く民も王を慕っていた。

小さかったが平和な国だった。

誰もが暖かい食事をすることができ、寝る場所があった。

隣の者と家族のように接せられた。陽気に歌い笑える国。

この国の王には7人の娘があり、末娘以外はみな他国へ嫁いだ。

小さな国を守るための政略結婚であったが

娘たちは一言も不平を口にすることなく、笑顔で父へ別れの挨拶をした。

祝いの席が終わると決まって王は、すまない幸せになっておくれと泣いた。

やがて1人残った姫は16になり、美しく育った。

姫の名はフィノア。

すこし癖のあるとび色の長い髪を結い上げ綺麗なうなじをしていた。すらりと伸びた手足、ぴんと伸びた背筋。

澄んだ川底を思わせる瞳はガラス玉のように輝く。

なだらかな白い頬は柔らかく笑みを作り、無邪気な笑顔は回りを和ませた。

父は酒に酔うと亡き妻の目に似ていると誉めた。

年老いた目に涙がうつすらと浮かんだ。

華やかさを称えられることの多いフィノアだったが今は目を伏せ静寂の中、窓際にたたずんでいた。

ガラスごしの空を少し見上げ再び視線を手元に戻す。

机の上には白い封筒が一つ置かれていた。

しばし凝視し、フィノアの指がそつと表面を撫でてゆく。

どこにでも売っているような質素もの、裏の印も無い。

差出人名は無かったがフィノアには誰から届いたものかわかっていなかった。

窓から差しこんでくる午後の日差しが体を包んでいたが

震える指先は冷えていく気がした。

ふと窓の外に顔を上げると数羽の小鳥の影が過ぎ去る。

城内の静かさが心を侵食していくようだった。

末姫（後書き）

小分けにするため、量を少し削りました。

ワルツを（前書き）

過去に貿易で繁栄し衰退した小国の美しい末姫と、戦争で築いた大
国の兵士のお話。

ワルツを

数ヶ月前。

その夜、きらびやかな舞踏会の中央にフィノアはいなかった。

三日ほど前に正式に婚約を結んだ。

フィノアは姫としてはおそらく最期の舞踏会を楽しむ気にはなれな
いでいた。

何人もの顔見知りである他国の姫や王子が誘ってはくれたが
足は重く、笑う自信もフィノアにはなかった。

めでたくフィアンセとなった王子は幸いにもいなかたつため情けな
い顔を見せずにすんだ。

王子はきつと他の女性の所にいるのだろう。

お互い望んだ結婚ではない。他の好きな人がいよつとかまわなかつ
た。

夫となる男は三十歳になる第二王子。嫁ぐのは中堅の国で発言力も
持っている。

小さい田舎の一国とは比べ物にはならなかった。

どこに行くにもついてくる次女や召使、豪華な食事、

綺麗なドレス、大きすぎる宝石のついた指輪。

つめたく冷え切った城内の雰囲気飲み込まれ、孤独を感じる。

幸せになどなれるはずがなかった。

フィノアは城を出てゆく姉の顔を思い出す。

みな辛そうに顔を伏せるのは、姉妹の別れが辛いからなのだと思っ
ていた。

またいつでも会える、だから悲しまないでほしいとはげました。勘違いもいとこだわとフィノアは心の中で笑った。なんて愚かなフィノア。おめでたい子ね。お嫁に行った姉たちは一度も国に戻ってはこなかった。

その場にうづくまって泣きたい衝動を抑え、下唇を強く噛む。

舞踏会の演奏がひどく遠いように聞こえる。

誰かの笑い声と、グラスの音がぐるぐると頭の中を回る。

昼間のように明るいホールの端、

フィノアは壁に背をもたれさせ踊る人々を眺めるフリをしていた。

今はどこか別世界のようにだった。

いつもフィノアはその中心で、花のように笑い、踊った。

そうしていた日々がもうずいぶんと昔のようで、それは自分でない気がした。

あの頃に戻れたなら。

なにもかも、最初からこうなると知っていたのなら…

「踊ってはいただけませんか」

かけられた言葉に一瞬体がすくんだ。

声の主が誰であるのか顔を上げずともわかった。

優しい声なのに鼓膜を震わせ心をかき乱す。

返す言葉は一つしかなかった。腹から返事を搾り出し答えた。

「もうしわけありません」

そう、最初からこうなると知っていたならば、想い人などつくらなかつた。

毎晩彼の生死を神に祈りなどしなかつたのに…

断りの返事を返しても青年はフィノアの前から立ち去ろうとはしなかつた。

黙りこみ、そこから離れない。

青年の背は高くがっしりとした体格で、炭のように黒い髪をしていた。

その瞳も紙と同じだったが黒曜石のように輝く強さを秘めていた。名はティータ、フィノアの三番目の姉が嫁いだ国に仕える側近の一人であった。

若いながらにして戦争で名を挙げ、いくつもの勲章を授与されていた。

いずれは王の信頼を置く騎士となり国を動かしていくこととなるであろう立場にいた。

誠実さと利発さを兼ね備えた理想的な青年であった。

そつとティータに手を取られ、フィノアが手を引くまえに握り締める。

剣を持つことに長けた硬い手だった。

この長く無骨な指先に撫でられるたびに胸を焦がした。

思い出してはならない、こんな想いはもう捨てなければならぬのだった。

フィノアは胸が痛くてたまらなかった。

しかし指先から暖かさが伝わって甘い感覚が全身にしみこむ。

「あなたをお慕いしております、今も」

低く甘い声で優しく告げられる言葉。

その全てがフィノアの心には毒薬だった。

いつそのこと、その言葉を受け入れてしまえたのならば…

ここから二人一緒に、どこか遠い国まで逃げてしまえば…

そう思うたびに父や姉、民の顔を思い出しそんなバカなこと出来はしないと首を振った。

自分ひとりのことでないのだ。結婚しなければならぬ。

フィノアは、それが自分に決められた運命だと必死に思い込んだ。

「　　っもうしわけありません……」
顔をうつむけたただそう答えることがフィノアの精一杯だった。
声が震えているのは、きつと気のせいだと指をきつく握り締めた。
早く、早くどこかへ行って欲しい。
視界に入らない場所へ行ってくれば、この胸の痛みも少しは収まるだろう。

あの目に見つめられているかと思うとそれだけで目元が熱くなる。
泣くことは決して許されなかった。口内を強く噛む。

「必ずあなたをお迎えにあがります、どうか、どうか……」

「ティード、もうそれ以上は」

口にしてはだめ、と首を振り青年の手のひらをすりぬける。

彼の考えていることは禁忌に近かった。

逃げるように、王子の横を早足で通り抜けた。

その時の王子が小さな声で何かを言ったが、

フィノアは耳鳴りのせいだと自分を誤魔化した。

フィノアは庭園まで出てから最期に顔を見ておけばよかったと後悔をしたが

きつとそうしていたならば、泣いてしまったらうたと弱い自分を笑った。

静かなタイムリミット（前書き）

婚約者がいながら兵士を愛してしまつた姫。その姫を慕い続ける兵士。婚約成立数日前のパーティーで偶然にも再会をしてしまふ。兵士はそれでも愛している気持ちは変わらないと告げ……

静かなタイムリミット

ドアを二度ノックする音に、フィノアは慌てて顔をあげ笑みを作り上げた。

そして封を開けていない手紙をにぎりつぶした。

「どうぞ」

静かにドアをあけ入ってきたのは初老の執事。

白髪のみじりだした髪であったが姿勢はびんと伸び、

執事とは言っても王の側近であった者で、フィノアが生まれた時から側にいてくれた。

初めて馬に乗った時も彼が側についていたし

ダンスの練習相手はいつも彼がしてくれた。

フィノアにとってはもう一人の父親といってもよい存在だった。

「姫様、お茶をご用意しましたのでテラスの方へどうぞ」

「ありがとうございます」

そう告げ一例し、部屋から出て行った。

フィノアはため息を一つつき、チェス盤を手に取り部屋をでるた。

城の中は深夜のように静まり返っていた。

どの部屋もがらんと空いており、人はもうほとんどいない。

逃げたのだ。よその国へと。

今、国は侵攻されつつあった。戦争をしたことのないこの国に勝ち目は無かった。

王はいまだ戦場から戻っていない。

誰かが言った「なぜ戦争をしかけてきたのですか、わが国は中立国なのに」と言った。

王はこう答えた「悲しいことだけれど人は争いあうことで

生きることを喜びと感ずる生き物だから」と。
幼き頃にそう部下に言った父親の苦しそうな顔をフィノアは今でも
しっかりと覚えている。

フィノアは父のひざに座って読んでもらっていた絵本を次のペー
ジをかえた。

父の悲しい顔を見たくなくて、「次のページを読んでくださいお父
様！」と言いながら
次のページをめくった。

すまないね、と父親は苦笑して続きを読み出した。
フィノアは話題を逸らせてよかったと幼いながらに思った。

人の笑った顔が好き。悲しい顔や怒った顔は嫌い。
だからみんな仲良くくらし、笑顔がいつぱいの日のあたる幸せな
国を夢見た。

この国は大昔に行き場所の無くなった人たちでつくられた国だった。
それは、まるで温室のような、そんな国だった。

戦争で負けた国の人々や傷つき生きることになった者。
国を追い出された民族、虐げられた民族、そんな人たちばかりの寄
せ集め。

周りの国からは傷の舐めあいだと笑われたが、誰も否定しなかった。

この国は、この場所は、温室だから。

温室の国は戦争はしないし、外部から守ってくれる、
もう戦わなくてもいい、もう傷つかなくていい、もう怯えなくても
大丈夫、

みんなで一緒に守るから。
そう言って笑顔で国を愛した。

それから何千何万たった温室の国は、もはやすたれていた。

みんな旅立って行った。

結局の所、温室の国は一時的に幸せの国にはなったが、いつのまにか国民は増えすぎ小競り合いやいがみ合いがどこでも起こりだした。

賢者や魔法使いたちは、もはやこの国は先は長くないと見切って出て行った。

それと同時に守護獣や野生のドラゴンたちもどこかへ行ってしまった。

綺麗な銀杏並木はもう死に、草原には家がたち、美しい湖はダムで枯れた。

古くから住む人々は悲しみながら、また次の温室を探しに出て行ってしまった。

残されたのは鈍感な人々と行き場の無い空しい人々。

代わりに入植してきた民族とはどうしても和解できずに、出て行くことになった。

今となつては、太古に存在した温室の国を絵本にして残すのが精一杯だった。

絵本の出だしは「むかしむかし、おおむかしのそのまたおおむかしに夢の国がありました。

人々は争うことなど知らず、毎日笑顔で暮らしていました……」

「そんな本当に夢みたいなのですか？」と、フィノアは父にたずねた。

もちろん、と王は笑った。少し悲しさを含んだ笑いだった。今でも覚えている。

剣の練習による金属音も、よく廊下にひびいた笑い声も今は無く小鳥のさえずりだけが耳にとまる。

突如として宣戦布告をしたのは三番目の姫の嫁いだ国だった。

荒れはじめた庭園でフィノアはチェスのコマを並べ、執事は紅茶

を入れた。

「いいお天気ね」

「さようでございますね。本当に平和でございます」

ポーンを動かしながら執事が答える。フィノアはナイトを動かした。

「みんな打ち首になるのかしら」

「そのようなことには」

ありえませぬと言いながらコマを動かす。

「そうね、相手の国は悪い方ではないもの」

「姫様……」

「私のせいなの、全部。」

お姉さま方はどう思われるかしらね」

「この戦争はただの侵略戦争です、姫様のご婚約など関係ありません。」

安心して嫁入り仕度をしてくださいませ。

個人的なことですがわたくしは姫様のウエディングドレス姿を見と
うございます。

それまでこの国は滅びられては困るのですよ、わたくしもそれまで
死ぬわけにはいきませぬ」

フィノア嫁ぎ先の国は、三番目の姉の国にすでに負けていた。
進攻は今この瞬間も進んでいるのだらう。

静かなタイムリミット（後書き）

次で完結です。ここまで読んでくださってありがとうございます。

その剣に貫かれるべきは私なのです。

チエスをしていた時だった、城のどこかで布を引き裂くような悲鳴が上がった。

フィノアは思わず立ち上がりそうになったが、顔色一つ変えぬ執事を見て悟った。

もう城まで進攻しているのだ。

すぐそこまで、この国の崩壊が来ていた。

ガチャガチャと回廊を複数の人間が歩く音が聞こえてきた。

もうこの城に残っている男はフィノアの目の前にいる執事のグルタのみだったので

男たちは敵国の兵士だと簡単に予測できた。

足音はだんだんと近づいてき、ついに庭園の前で止まった。

「フィノア様……」

それは何度と焦がれた声だった。

「ティーダ……」

フィノアはそれ以上言葉が続かなかった。

血のついた甲冑に身を包み黒い瞳が炎のように燃えていた。

愛しい人だった。

会いたくてたまらない人だった。

それなのに心の奥底は凍てついていた。

「お下がりにください姫さま」

執事が立ち上がり、テーブルにたてかけられていた剣に手を伸ばす

「わたくしは姫様を守るよう陛下から言い預かっております」
「そう言い鞘から抜く。」

戦う意思を表した執事にティータは顔を崩す。
切っ先を下ろしたまま必死に言った。

「私にもうこれ以上血を流させないでください
どうか、黙ってお退きください」

「お引取りを」
硬い声で執事が返すと、それまで哀願さえこもっていたティータの
声も強い意志がこもる。

「出来ません」

「それではしかたありません」
すっと執事は剣を抜き、かまえた。

今でこそ執事だが王の側近として使えてきたグルタの腕前をフィ
ノアは知っていた。

どちらが勝つかわからなかった。

ティータは剣を一振りし赤い血を落とす。

ぽたつと音をたて芝生に血が散った。

「グルタやめて！ティータ！」

「たとえ一つの国を滅ぼすことになるうとも、あなたを愛しており
ます。姫」

「姫様はご婚約なさいました」

鋭利な刃物のような声でグルタが答えた。

その言葉にティータは吼えるように声を荒立て叫んだ。

「それがなんだというのだ！政略結婚ではないか！」

「そうしてこの国は生き延びてきたのです、お若い方」

「不幸で支えられる国など、存在してはならない」

剣を構え、怒りを抑えた声でティーダは答えた。

グルタは少し笑い、剣をひねった。

「…それもまた一つの在り方なのですよ」

「姫、あなたの前で血の流れることをお許しください」

そう言い終わるとグルタが一閃する。銀の剣がティーダの首元を狙う。

ティーダは剣先を退かせ討つ。

グルタのわき腹をかすめいったん退き

胸に狙いを済まし付く。

が、グルタにからめとられ逆に甲冑の縫い目を狙い攻められる。

間一髪でそれを交わしたティーダの腕が伸びる。

グルタの剣はまだリーチで戻れない。

ティーダの切っ先が執事の首に届く。

両者動きをぴたりと止める。ティーダの勝ちだった。

フィノアの目から見てもわかったが、グルタは剣を収めようとはしなかった。

グルタの切っ先はティーダのほおをかすめ宙へと放り出された。ティーダの剣はグルタの首をはねていた。

煌々と燃え盛る獣のような瞳で血をかぶっていた。

フィノアは優しさの奥に秘めたその力強い瞳に惹かれていた。

おそらくこういうことになるだとわかっていたが

わからないフリをしていた。

わかりたくはなかった。

戦争の原因、父を殺した原因、どちらも自分だった。

父もこうしてこの青年の手にかかったのだろうか。

フィノアは幸せになることを許されるとは思えなかった。

この後どうなるかはわからなかったが、

一生罪を背負っていかなければならないと思った。

幸せの代償はあまりに大きすぎた。

ティータは放心状態のフィノアの前にひざをつき、仰ぐ。

その瞳には晴れた青空とフィノアしか映っていなかった。

「お迎えにあがりました」

いつもの忠犬のような目で礼儀正しく優しい彼だった。

「ありがとう」

フィノアは声しぼりだし、涙をこらえた。

そしてこれから背負う罪と罰を噛み締めた。

> i 9 4 4 1 — 1 3 9 7 <

その剣に買かれるべきは私なのです。(後書き)

おしまいです。

ここまで読んでくださった方ありがとうございます。
短編だったのでとても楽しんで書くことが出来ました。
今後もよろしければ、他のお話も読んでやってください。
ありがとうございます。

次の作品、蝉女(仮) <http://ncode.syosetu.com/n7679m/>
も、よろしければどうぞ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6334m/>

小さな国のお姫様と大きな国の兵士の物語。

2010年10月16日06時57分発行